

「夏のあいだは不要ですが、冬になると、その草花は食べる物がなくて枯れてしまうのです。だから、寒いあいだは、それでカを作って与えなければなりません。ボウフラの育て方は、これに書いてあります」

博士から説明書を渡され、アール氏はそれを読んだ。そして、首をかじげながら言った。

「たいへんな手間ではありませんか。いったい、この草花は便利なものだろうか、不便なものだろうか。わけがわからなくなってきたぞ」

夜の事件

そのロボットは、よくできていた。若い女の人の形をしたロボットで、外見からは本当の人間と見わけがつかないほどだ。楽しそうな表情をしている。だが、頭のほうはあまりよくなく、いくつかの簡単な言葉がしゃべれるだけ。しかし、それでいいのだった。町はずれにある遊園地の、門のそばに立っているのが役目なのだから。

昼間は、とてもにぎやかだ。音楽も流れているし、いろいろな人が声をかけてくれる。そして、ロボットもいそがしい。

しかし、いまは静かな夜。人通りもなくなり、ロボットはだまつたままだった。

その時、とつせん物がげから見なれない連中があらわれ、ロボットを取りかこんだ。むらさき色をした顔で、大きな赤い目をしている。あまり感じのいい姿ではなかった。腰には、武器らしいものをつけている。

「手むかいしても、むただぞ。われわれは、キル星からやってきた」

と、ひとりが言うと、ロボットはやさしい声を出した。

「遠いところから、ようこそ……」

「いやに落着いているな。われわれは、地球をていざつに來たのだ。まず円盤状の宇宙船を上空でとめ、そこから望遠鏡で観察した。また、ラジオやテレビの電波を受信して、言葉をいくらか覚えた。だが、完全な報告書を作るには、地球人をさらにくわしく調べなくてはならない。そのために着陸したのだ。いずれは、この星を占領することになるだろう」

「はい。あなたがたを心から歓迎いたしますわ」

「これはふしぎだ。あまり驚かないようだ。ねほけてでもいるのだろうか。それとも、われわれを甘く見ているのだろうか。少しおどかしてみよう」

キル星人たちは油断なく身がまえ、ムチのような長い棒を振りまわした。それが当たったが、ロボットは笑い顔で明るく答えた。

「ありがとございます」

「どういうわけだろう。なにも感じないらしい。お礼など言っている。ほかの方法でやってみよう。われわれは、地球人の弱点を発見しなければならないのだ」

しかし、強い光線を当てても、いやなおいのガスを吹きつけても同じことだった。

「……」

とロボットはくりかえし、時どき軽く頭をさげる。キル星人たちは、顔を見あわせて相談した。

「だめだ。どんな武器を使っても、ききめがないようだな」

「ああ、地球人というものは、こわさや痛さを知らないのかもしれない。めったにない強敵だ。うすきみが悪くなってきたぞ」

「いや、地球人は戦うことを知らない、平和な種族なのだろう。こんなにいじめても、さつきから少しも反抗しない。こんない人たちの住む星を占領しようとしているわれわれが、はずかしくなってきた」

「いずれにせよ、このまま引きあげたほうがよさそうだ」

その意見にはみな賛成だった。歩きはじめたキル星人たちに、ロボットはお別れのあいさつをした。

「もうお帰りになるの。また、いらっしやってね」

キル星人たちは林のなかにかくしておいた宇宙船に乗り、飛び立っていった。それは高速度で音もなく遠ざかった。空をながめていた人があったとしても、流れ星としか思わなかったにちがいない。

やがて朝がきて、遊園地には人びとがやってくる。笑い声や叫び声が聞こえはじめる。ロボットはなにごともしなかったかのように、お客から声をかけられるたび、簡単なあいさつをくりかえすのだった。

「ようこそ……。心から歓迎いたしますわ……。ありがとうございます……。またいらっしゃってね……」

地球のみなさん

そこは、町でも特に人通りの多い場所だった。ひとりの青年が道ばたで立ちどまったかと思うと、とつぜん大声をあげた。

「地球という星のみなさん。やっと、あなたがたとお会いすることができました。わたしは、うれしくてなりません」

通りがかりの人びとは驚いて足をとめ、いつせいにそつちを見た。その青年はおとなしそうな顔つきで、小さなカバンをさげている。青年はにこにこ笑いながら、またもこう言った。

「みなさんといっしょに、この記念すべき日を祝いましょう」

人びとはびつくりして聞いていたが、そのうち、だれかが気がついたように言った。「あつ、そうか。きょうは四月一日、エイプリル・フルか。冗談を言って他人をかついでもいい日だった。これはうまくやられたな」